この国立公園は奈良・三重・和歌山の三県に跨がり、紀伊山塊の山岳景観と、熊野灘の外洋景観と、これ等を結ぶ北山川・熊野川の峡谷河川景観とを包含する珍らしい特色をもつている。しかも紀伊山塊は火山国日本の国立公園としては秩父多摩以外に見られない水成岩の構造山地で、南西日本の外帯に属する。熊野灘は海岸風景に富んだ日本でも屈指の外洋美を見せている。この山塊の大部分は吉野川流域の延長線上にある中央構造線に略々平行して古生・中生・新生三代の地層が現われ、その海岸には新生代の第三紀層が相当広く分布している。大峯山脈の南部には石英斑岩、熊野川下流から熊野海岸にかけては石英粗面岩がかなり広く現われている。これ等の火成岩は何れも火山を構成しているわけでなく、多分同一岩漿が局所的に成分構造を異にして種々の名称で呼ばれているものらしい。この山々は地形から観察すると幼年期を示しており、隆起準平原の開析状態は未だ若く回春景観を呈している。これは大峯山・大台が原山等の吉野群山が準平原化作用によつて一度水準面に近くなつたものであるが、再び隆起して侵蝕を始めたことを意味している。しかも此の隆起面の最高は実に一、八〇〇米にも達し、大杉谷・熊野川等はその二大支流である十津川・北山川等と共にこれ等水成岩の隆起によつて全川峡谷を穿つて若返り先行谷の標式的なものである。北山川の硬質粘板岩及び砂岩から成つている部分には有名な瀞（下とろ・上とろ・奥とろ）の峡谷があるが、世に瀞八丁と呼ばれるのは下瀞（約一、三粁）の部分である。この峡谷の成因は紀伊山地の東西性走向を有する地層を南北に横断する横谷が準平原時代に蛇行曲流したまま遺伝流となつたためである。従つて曲流の著しいまま両岸は絶壁で岩脚碧水の勝地を構成している。熊野灘は太平洋の特異な外洋海岸線であり、潮岬の岩礁と共に他の国立公園に見られない外洋景観を呈している。

この公園の自然景観を以上の特色で纏めると北部の山岳部大峯・大台ガ原地帯と、南部の海岸部熊野灘地帯と、その中間の峡谷部である北山川・熊野川地帯とに分けられるので、次にその三地帯の区分によつて観察しよう。

大峯・大台ガ原地帯

この区域は大峯山脈の大天井岳（一、四三九米）から涅槃岳（一、八七五米）に到る間を主体とし、一方伯母峯峠（九九一米）によつて大台が原山及大杉谷に連なつている。大峯山脈は俗に大和アルプスと呼ばれ、南北に長く続くので褶曲山脈のように見えるが、実は断層に基因した熊野本流の十津川（西辺）と吉野川上流（北東辺）及び熊野川の支流の北山川（東辺）とに深く刻られた地畳と考えられる。大台が原山塊は伯母峯峠の断層線で大峯山脈と接し、大杉谷はこの山塊の東縁部となつている。大台が原山塊の山頂部（一、五〇〇～一、六〇〇米）は硬砂岩の水平層から成つていて、若がえり前の準平原を物語つている。

大峯山脈の北部と大台が原山塊の全部とは中生代に属する砂岩・硬砂岩・角岩・粘板岩・泥板岩・礫岩等の水成岩類から成つていて至る所に水成岩独特の山岳風景が織り出されている。その

最も著しいのは大台が原山に源を発している東ノ川（北山川の一支谷）の源頭に削立する硬砂岩の大絶壁であるが、大峯山の主峯山上ガ岳（一、七二〇米）の角岩の危岩絶壁、その支峯大日山（一五九三米）の礫岩の恐るべき大絶壁、大台が原山下の角岩の峡谷等はどれを見ても驚嘆に値するものばかりである。この一帯は豊饒な地味と多湿な気象に基因して森林の生育も立派であるが、大杉谷は見事な原始林と多数の瀑布とで近畿地方には珍らしい一大秘境をつくつている。この滝の多いことは恐らく堅い砂岩と脆い頁岩が互層しているためで水成岩地風景の一面を現わしている。

北部山岳部一帯は温帯林に属し、落葉広葉樹で被われているが、吉野林業地として知られている所は古くから主としてスギの人工造林地となり、仏経岳（一、九一五米）～大日岳（一、五九三米）一帯を除く外は天然の美林が殆んど見られない。但し大峯山系一帯の尾根筋は古来峯中と称せられ禁伐となつているので、この一帯はツガ・モミの天然林が残つている。大台が原山頂一帯はツガ・モミ・トウヒ等の昼なお暗い美林であつたが、早くから伐採されて今は見る影もなくなつたのは惜しいことである。大峯山系の山頂部附近にはオオヤマレンゲ・シャクナゲの大群落があり、天然記念物として指定されている。又大峯山脈の北端に飛地として編入されている吉野山の桜は、森林とは異なる美しさで古くから有名である。なお吉野川一帯にはトガサワラの純林があるが、この辺りの大部分は吉野林業の中心である吉野杉の人工造林地が多く、人工森林美の極致を示している。従つて人文景観ではあるがこれ等の伐木に伴う筏流しの絵画的な姿は、北山川・吉野川の風致を一段とたかめている。

瀞八丁　熊野川の支流北山川には，約 40 粁に及ぶ急流北山峡があるが，これに続く約 1.3 粁は下瀞と呼ばれて前者とは全く異る静的の景観である。河水は全く鏡のように静止して流れているとも思われない。大昔下流にあつたと想像される大瀑布がつくつた滝壺が，漸次後退して出来上つたものと考えられる。北山峡の急流はその滝の分解されたものである。

北山川・熊野川地帯

北山川は北山村の小口から下つて七色滝まではさほどの急流でもないが、七色滝をすぎると景観が一変して、両岸に低い岩石段丘を造つている堅い岩の間を、深く嵌入した蛇曲流が左右にぶつかつて水煙を濛々とあげているか

と思うと、忽ち静かな碧水の潭となるなど、立体的景観に動的、静的な変化が加わつて飽きることを知らない。峡谷としての偉観は黒部の規模には及ばないが、舟行の感銘は木曾川・富士川・球磨川等よりは遙かに深いものがある。

この北山峡約四〇粁の次に静寂そのもののような瀞八丁が約一、三粁に亘つて続くのである。鏡のように静止して流れているとは見えぬ静けさは前者と著しいコントラストをなしている。

北山川は瀞八丁の下流一二粁の所で十津川の濁水と合流して熊野川となるが、この合流点以下の熊野渓谷を九里峡と称し、南画式風景を見せている。

熊野地方は概ね常緑広葉樹林帯となるが、この流域では白見国有林や新宮の千穂が峯に美林を見せるほか大部分は人工造林地となつている。しかし北山川の瀞附近では森林は岩壁や碧水の景観を更に幽邃にしている。

鬼が城の海蝕崖　木本町東方の岬にあるが，石英粗面岩の海蝕崖で海に面して数段に分れている。各階段毎に多数の波蝕洞窟が並んでいるが，これは有史後の地震による土地の隆起を示す興味深い天然紀念物である。

熊野灘地帯

熊野灘に面する国立公園地帯は北に木本・新宮間の七里が浜と称する白砂青松の隆起海岸を有すると共に、南には三輪崎・潮の岬間の変化に富んだ沈降海岸を有し、変化のある海岸風景を有する点にこの特色がある。

新宮以北の単調な海岸は第四紀の隆起低段丘からなり、その上に国有林のクロマツ林がよく茂り、長汀曲浦の途中井田の八丁松原・市木松原・有馬松原等を過ぎ、延長約二〇粁に及ぶ沿岸を一直線にドライヴウェイが走つている。松林が尽きた所に花窟（ハナノイワヤ）（海蝕洞窟）のある石英粗面岩の絶壁が直立しており、その北に同じ岩質から成つている天然記念物の獅子巌が波打際に屹立している。木本町の東に鬼が城の岬があるが、これも石英粗面岩から成り、その海に面した岩壁が数段に分れ、各階段に大小多数の波蝕洞窟が並んでいる。これは有史後の地震による土地の隆起を示す

興味深い天然記念物である。

新宮から潮岬に至る間の宇久井半島・勝浦半島・太地半島・玉之浦半島・大島及潮岬半島等とその湾入屈曲海岸一帯は石英粗面岩を伴つている第三紀の頁岩・砂岩・礫岩の互層から成つており、頁岩の中には那智黒と呼ばれる黒色硅質のものもあるが、一般には余り硬くない灰色のものが多い。砂岩・礫岩にも硬軟両質があるのと、この一帯に断層が多いのとでこんな複雑な地形が生れたのである。又大島と潮岬とは硬い火成岩の石英閃緑岩や石英閃緑玢岩から出来ており、更に種々の岩脈が貫入している。有名な橋杭岩も石英安山岩の岩脈が海波に冒されて断片的に残つたのである。今は半島となつている潮岬も元は大島と共に一対の双子島であつたのが、本土との間に風波が砂を吹寄せて砂洲を発達させ、陸繋島（トンボロ）としたのである。なおこれ等の島や附近の海岸は隆起海成段丘であるから、上面が平坦となり海積礫層が残つている。又黒潮の激浪が如何に海蝕の偉力を発揮するかは、大島の本土に面する北岸が極めて平凡な風景であるのに、同地質の南岸が優れた風致を示すことで理解される。勝浦附近も同様山成島・鵜島等多数の島嶼岩礁が浮かび、豪快な海洋景観を誇つており、耳の浦一帯の断崖にはウバメガシの純林が頗る美しく茂つている。

なおこの地帯で傑出した風景として那智滝がある。熊野権現の御神体であると云うが、高さに於いて一三〇米以上、巾約一三米と称せられ、直下するものとしては本邦第一と考えられる。しかもその周辺の環境は老杉亭亭として繁り、頗る崇厳で名瀑といつてよい。又この地帯は火山に縁遠いところではあるが、勝浦・湯川・湯の峯・川湯等数多の温泉があるのも珍らしい。

一

吉野熊野といえば今でも近畿地方にのこされた人里遠い秘境を連想する。就中大峯山、大台が原の一帯はそうである。しかしながら神武天皇は東征の際河内から大和に入る計画を阻まれて、海上を熊野浦に上陸、山岳地帯を北進して大和に進駐されたと伝えられている。北進の行路は北山川であるとも、十津川であるともいわれ詳かでないが、一條の径が河川に沿つていたと考えてよいであろう。しかしながらその後大峯山や大台が原一帯は大和平野の発達と対比的に益々とりのこされ、修験道の開祖である役行者小角が大峯山を開くまで人跡を退けていた。小角の事蹟は神仙的な修験道に強調されて著しく脚色され、殆んど事実を捕捉し難い状態である。出生についても多種多説であるが、今から凡そ一三〇〇年位前の飛鳥時代の人といつて差支えない。

小角は先ず葛木山に入つて練行を積み、その後大峯山に籠つたものとされ、山上で祈願していて、温顔の地蔵菩薩の尊容を拝したが、本意とせず更に祈念をつづけて形相の激しい蔵王権現を拝したので、これを刻んで小堂を山上に営んだと伝えられている。そのとき蔵王権現を彫刻した材が桜を用いたので、その後桜が霊木とされて愛護増殖され、これを薪材とするようなことは、蔵王権現を火中に投ずるに等しいと虞れられた結果、いつか吉野が桜

の花の名所として知られるに至つたと伝えられる。

その後聖武天皇の天平年中に行基が大峯山に登り、大破した小堂の中の蔵王像を模して下山、これを安置したのが今の吉野の蔵王堂の基であると説かれている。修験道では大峯山を我国第一の霊峰となし、各峯は夫々仏が鎮座する浄土と信ぜられている。大峯山上の本堂は修験道の隆盛に伴つて一時は山上に三十六坊を具えるほどに発展した。従つて山上には種々由緒をもつ史蹟や興味ある伝説に富む行場もあつたが、神秘の霊境として山上の状態を口外することを憚り、記録を嫌つたために明らかでない点がすくなくない。しかし先年来山上の本堂附近から沢山の古鏡や掛仏など平安朝の優秀な作品が発見された。室町においても漸次隆盛を加えたが、天文三年(一五三四)三十六坊を悉く焼失して廃頽を招来、僅かに六坊の再興をみたにすぎなかつた。その後元和二年(一六一六)元録四年に夫々修復をみたのが現在の堂宇である。明治五年に太政官によつて修験道の廃止が行われ、一時登山も全く中絶した形であつたが、しかし間もなく再興され、昔時の盛観は知る由もないが、その名残を偲ぶことはできる。

大峯山は平安朝既に多数の貴顕、名僧の登山がすくなくなく、大峯に因む詩歌はすくなくないが、大峯の歴史は常に修験道と並行する。その発展と共に南は紀伊の熊野から北は金峯山より吉野に達する延々九十粁に及ぶ長大な区域が修験道の霊地とされ、現に出羽三山と共に修験道の遺風を伝え、女人禁制を守つている点で、全国に類がない。

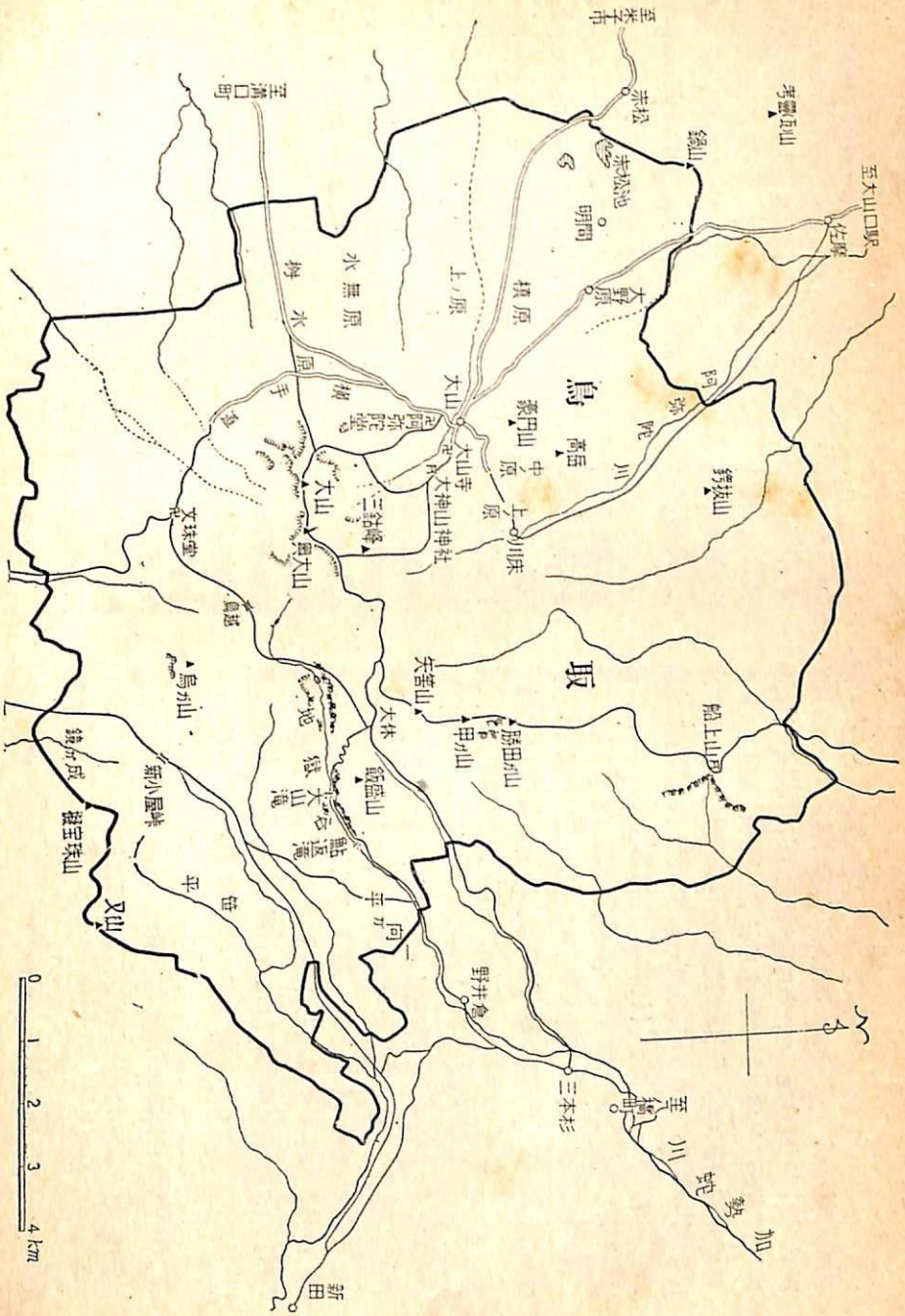
この霊地がそのまま吉野熊野国立公園の背柱であるが、その豊かな歴史に対比して、大台が原山の団地は極めて淋しい。大峯山の隆盛と対象的に大台が原山は永い間文字通り人跡未踏の秘境であつたが、明治初年に偉大な旅行家松浦武四郎により拓かれて、今日に至つた。

著名な吉野の桜は全部山桜でしかも白山桜である。小角が蔵王権現を桜で彫んで以来、神木としての桜は地元民も参詣人も互に戒めて損傷を防ぐと共に、後には人工で植栽したものである。最初に選ばれた地帯が七曲り附近、今の下の一目千本であつて、その実現は主として修験道の信仰による寄進である。現在では更に奥、上、中と計四ケ所の一目千本があるが、後者はいずれも明治以後のもので、昔時の分は下の一目千本だけであつた。吉野朝の哀史と共に吉野の人文は桜にも美しさを加えている。

熊野の三山は古来より「熊野詣」と称されて長い間信仰の対象であつた。熊野三山というのは本宮と新宮と那智の三社の総称で、本宮の熊野坐神社通称熊野権現といわれるもの、新宮の熊野速玉神社、それに那智の熊野那智神社の三つである。本宮は崇神天皇、新宮は景行天皇、那智は仁徳天皇の夫々の御宇に創建されたと伝えられるが、「三所権現」とも「熊野三山」とも総称されて古来から上下の崇敬が厚かつた。平安朝の末期から鎌倉の初期にかけ凡そ百二十年間に亘つて朝廷をはじめとして国民の参詣は最も隆盛を極めた。吉野朝になつて漸次衰微したが江戸時代には再び盛であつた。

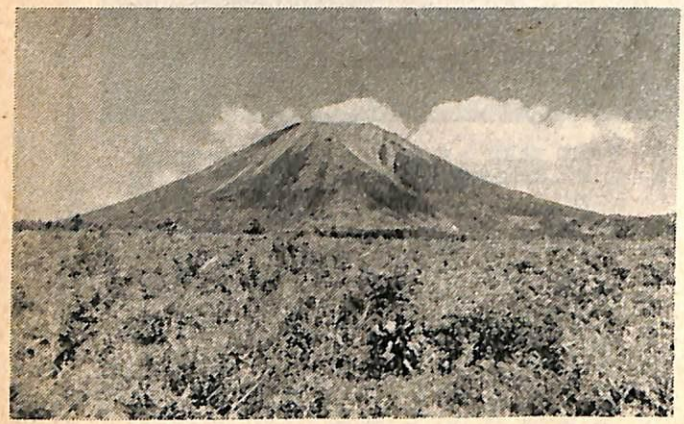
大山国立公園

指定　昭和11(1936)年2月1日
面積　12,403 ㌶



この公園は鳥取県にあつて中国地方の最高峰大山（一、七三一米）を中心とする日本海側唯一の国立公園である。白山火山帯に属する数個の鐘状火山（トロイデ）から構成されているが、主峰大山は日本の単独トロイデとして比高（八四〇米）の大きいことは第一位である。しかしこの火山群の初期の噴火によつて出来た烏ガ山（一、三八七米）、矢筈ガ山（一、三五八米）、甲ガ山（一、三二〇米）、勝田ガ山（一、三〇〇米）、船上山（七〇五米）等の山々と共に広濶な裾野を展開し、地形上コニーデとの結合型を示しているので、この区域総体から見るとコニトロイデとも云うべき地学的景観を現わしている。白山火山脈というのは加賀の白山から起り日本海に沿うて西進し、北九州の雲仙へ抜けているもので、山陰式火山とも云われている。前記の諸火山体が第二期噴火の大爆発により破壊されて、旧火山体の上に今の大山という粘質岩漿の火山錐が生したものと思われる。従つて後期噴出岩は黝色粗鬆で、黒色の角閃岩、黒雲母及び白色短冊形の斜長石斑晶を含む角閃安山岩で、大山の崩潰地・河川を被うているが、前期噴出岩は紫蘇輝石角閃安山岩であることが特色である。

主軸をなす彌山は高さ一、七一三米、最高峰はその東方にあたる剱ガ峰で一、七三一米、典型的な鐘状火山をなしている。この火山錐は比高八四〇米、斜面勾配三〇度で、大山寺部落を通る等高線附近で一〇度のスロープをなす裾野から屹立し、特に西方の斜面は完全に美しい裾野を展開し、伯耆富士、出雲富士の名で呼ばれている。しかし東北壁は物凄い爆裂口となり、急崖五七度の荒々しい男性的の山骨を露わし、西方の女性的な美しいスロープと著しい対照をして別な山を思わせる程である。殊に馬の背、らくだの背と称ばれる縦走路「ズリ」は岩石が風化崩潰して千仞の溪谷に落下し豪快である。従つて冬期氷雪に被われると全くアルプス型地貌を呈する。



大山の二態—その一　南東面　一つの火山が南北両面で，これ程地貌を異にしているのは他に見られない。南東側は伯耆富士と呼ばれる通り，コニーデの秀麗な裾野が見られ，上半身のトロイデと合せてコニトロイデと呼ばれているが，この南東面を眺めただけではトロイデとは考えられない。

この公園は前記の山岳群と、これに続く撰宝珠山と、区域外ではあるが上蒜山・中蒜山・下蒜山などの山々が雄大に展開し、裾野は長くゆるやかに一〇粁に及んで四方に発達し、北は日本海まで達しており、その間に大少二〇にも及ぶ幼年期の溪谷を刻む。東方には山中最大の地獄谷があり、大山滝・魚断の滝などがあつて加勢陀川の上流となる、また三鈷峰に発する溪谷はアミダ川の上流となり、川床の大溪谷をつくり、彌山の北絶壁に起る溪谷は、賽の河原・金門・南光河原の景勝地をつくつて佐陀川の上流となる。

大山の美しさの一つは数多くの広大な原野にあるが、その主なものは草谷原・大原・槇原・水無原・桝水原・福永原・茶園原・一向平・笹が平・鏡ガ成などで、特に桝水原は七—一〇度のゆるやかなスロープの草原で雄大に展開し、眺望は絶好で清水が湧出している。これらの広大な大山原野は黒色の火山灰いわゆるクロボクで〇・五〜二米の厚さに蔽われ、植物の育成する部分は次第に灰色を呈するようになる。

大山の二態—その二　北面　北面はアルプス景観の岩壁が連続し，雪を被つた冬期間の姿は誰も火山と想像することは出来ないであろう。全く「北の壁」と云いたいところである。

表土の下には赤褐色の土中に、まだ風化作用を受けない母岩角閃安山岩塊・角閃岩・長石などを混ずる。山麓には赤松の池・大野ガ池があり、頂上には楚字・地蔵の二つの小池がある。ここからの眺望は中国山脈を一眸におさめ、北方は宍道湖・島根半島・中の海・夜見浜等を俯瞰して遥かに隠岐諸島を望むことが出来、南方は中国山脈を越えて瀬戸内海を指摘することが出来る。なお三鈷峰は大山連峰中最北端の独立峰で、灌木や草本類に被われているが、山頂の小平坦部に立つて眺めると、大山の北の壁が威圧するように聳え立つている。従つて大山国立公園のコントロイデなる地学景観は、一方爆発的火山型景観である岩塊の奇と、他方牧野的景観である原野美との結合であつて、豪壮と優美との二大山容美を併有していることになる。

この公園の近傍には区域外ではあるが、大山の東方に三朝・関金・東郷その他二三の温泉があつて、何れもこの火山地帯と関連している。

大山は本州南部にある高山なので、山麓から山頂まで、高度に

つれて気温と湿度とに変化が多く、従つて生物の種類も多い。山麓帯（八〇〇米附近まで）―安定相の植物は常緑広葉樹であるが、野火・伐採などのために無くなり、クロマツ・アカマツが繁殖している外は、落葉広葉樹（ヤマナラシ・ヤマハンノキ・ヒメヤシヤブシ等）や灌木（ヤマツツジ・テリハノイバラ・アキグミ・メドハギ等）草本（マツムシソウ・ワレモコウ・カワラナデシコ）帯となり、湿地・陰地にはカングサ・ホラシノブや地衣類が岩上・樹皮等に着生している。又鳥類も繁殖し、シジュウガラ・ホホジロなどの小鳥のほかに、赤松池には冬期数百羽のオシドリが飛来する。

中腹帯（八〇〇～一、二〇〇米）―この辺りでは垂直分布が見られる。落葉広葉樹地帯ではシデ類・カエデ類・シナノキ・フサザクラ・ダンコウバイ・クロモジ等から次第にミズナラ・ハウチワカエデ・ウリハダカエデにブナを交え、一、〇〇〇米以上はブナの純林となり、これ等の樹海で日光も透さない大森林となる。またこの地帯は小形哺乳類・鳥類（ホトトギス・ジウイチ・ウグイス・ホホジロ等）・爬虫類（マムシ・トカゲ）・両棲類（ハコネサンショウウオ）・昆虫類（アゲハチョウ・シロチョウ・マダラチョウ・ダイセンシジミ・ウスイロヒョウモンモドキなどの蝶類一〇〇余種）が極めて豊富である。

山頂帯（一、二〇〇米～頂上まで）―ここでは灌木帯に草本帯が続いている。ダイセンヒョウタンボク・ダイセンクワガタ・ダイセンコゴメグサ・ダイセンスゲなど、大山の名のつく植物が多くあるが、キャラボクの群生は有名で天然記念物に指定されている。頂上近くのユートピアにはお花畑があり、昆虫類が集まつている。絶壁にはダイセンオトギリ・コメバツガザクラなどが繁茂し、数万のアマツバメが群棲している。

この公園は四季の変化により新緑・紅葉共によいが、殊に冬期氷雪の景観がすぐれ樹氷の景観も見られる。

中国随一の高山でしかも比較的海岸に近い大山は、樹海が果てもなく広がつていた上代には「国見」をする好適の場所として幾度か登山されたことであらう。出雲文化の発展と共に朝鮮半島から招かれた多くの人たちには何よりまず大山が航海の目標であつたにちがいない。出雲風土記によれば出雲の国の狭小を嘆いて何処にか余つた土地を求めた神が、はるか海上に一つの島を発見し、太い綱をかけてひきよせたと伝えている。引きよせられた島は今の美保関のある島根半島で弓ガ浜がそのときの綱であり、綱の根固めになつたのが大山であるとされている。

現在大山国立公園の利用拠点は大山の中腹にある大山寺の聚落である。こゝは沿岸一帯に比較して気温が平均五度程度低く、夏は避暑地として登山の拠点として、冬はスキーの基地として利用される。大山は豊富な雪と広大な裾野のスロープとのため中国・四国・九州あたりから利用を呼び、関西最大のスキー場といえる。戸数約三〇、宿泊施設も比較的整つているが、名山として大山が開かれたのは奈良朝にさかのぼる。現在の大山寺と大神山神社の

奥宮の創設がそれである。大山寺は天台宗であるが、朝廷からの尊崇が厚く、寺運は次第に隆盛に赴き、後には自ら僧兵を擁して寺領の守護に当つた。この山は又修験道の霊場として出羽三山や英彦山と共に著名である。元弘三年後醍醐天皇が隠岐を脱出して、船上山に潜幸されたときには名和長年の弟信濃坊源盛は大山寺の僧兵を率いて建武の中興に力を尽したと伝えられる。戦国時代になると一山の権勢は益々強大になり、その向背は群雄に影響することが大きかつたので、諸将の寄進がすくなくなかつたので寺運は益々隆盛を極めた。一山のうちに西明、南光、中門の三院があり時代と共に隆替は当然あつたらうが、江戸時代には本堂のほかに四十二の支坊が南光院、西明院、中門院の三つの谷をうづめていた。昭和三年に本堂並に附属建物を焼失したが最近本堂は再建された。昔時から大きな農家造りの宿坊は現在五棟をのこし、今尚昔時の味をのこしている。

大山寺部落の上手にある大神山神社の奥宮は権現造りの壮大な社殿で、境内には杉檜の老木が聳え、古色につゝまれて霊気が漂つている。大山の一支峰である船上山は名和長年の名と共に著名で東、北、西の三方が断崖絶壁となつた要害の地である。元弘二年三月、後醍醐天皇は北條高時のために隠岐に遷されたが、翌春勤王の諸将が各地に起つたと聞かれて、島を脱出、伯耆の港に着かれた。大山の北斜面の名和村の豪族、名和長年は一族をひきいて天皇を迎え、船上山に登つて籠城した。当時船上山上には智積寺があり相当の坊舎も経営されていた。判官佐々木清高は三千余騎を率いて船上山に攻寄せたが、長年はこれを退けて国中を平定した。船上山は建武中興の発祥地であるが、現在山上には船上神社の一宇とその傍に行宮碑が建てられているにすぎない。しかし今奥の院と称する一帯を仔細にみると樹間に坊舎のあつた状態をうかゞうことが出来、礎石の基列もみられて昔時を偲ぶことができる。行在所は遺憾ながら現在明白でないが船上神社の傍の船上山碑は江戸末期、安政四年山麓の富豪橘井富三郎の建立と伝えられている。

瀬戸内海国立公園

この公園は紀淡、鳴門、豊予、関門の四海峡によつて外海と劃された、一、九四〇、〇〇〇陌にわたる瀬戸内海の島嶼の一部と沿岸の主要な展望地を含み、和歌山、兵庫、徳島、香川、岡山、広島、愛媛、山口、大分の九県に跨がる世界に稀な海上公園である。瀬戸内海は日本のような島国にとつては全く珍らしく大きな内海である。日本列島が現在の輪廓をとるに至つた生い立ちの過程の中でこの内海ほど重要な役割を果しているものはない。瀬戸内海は大きく陥没した地溝帯に小さいブロツク相互の浮沈があり、且つその一つ一つのブロツクが更にモザイツク構造を示しているので、その凹凸に海が浸入して多くの島嶼となつたり又無島部となつたりしている。しかも基盤が概ね花崗岩地帯であるから、その風化産物の白い石英や長石の砂浜にクロマツ林が映じて所謂白砂青松の景観を呈している。従つて内海公園として世界的に誇り得るのは瀬戸内海全体にあるので、全区域が編入されてよいと思うが、何分にも東西約四〇〇粁、南北七粁乃至六〇粁に亘り大小約六〇〇の島嶼を浮べた多島海的内海で、その間にはかなり開発が進んだところも多いので、比較的自然景観に富む島嶼や展望地点及び主要航路から見えるところなどに限られている。

指定　昭和九（一九三四）年三月一六日
拡張　昭和二五（一九五〇）年五月一八日
面積　四〇、九七九陌（海面を含ます）

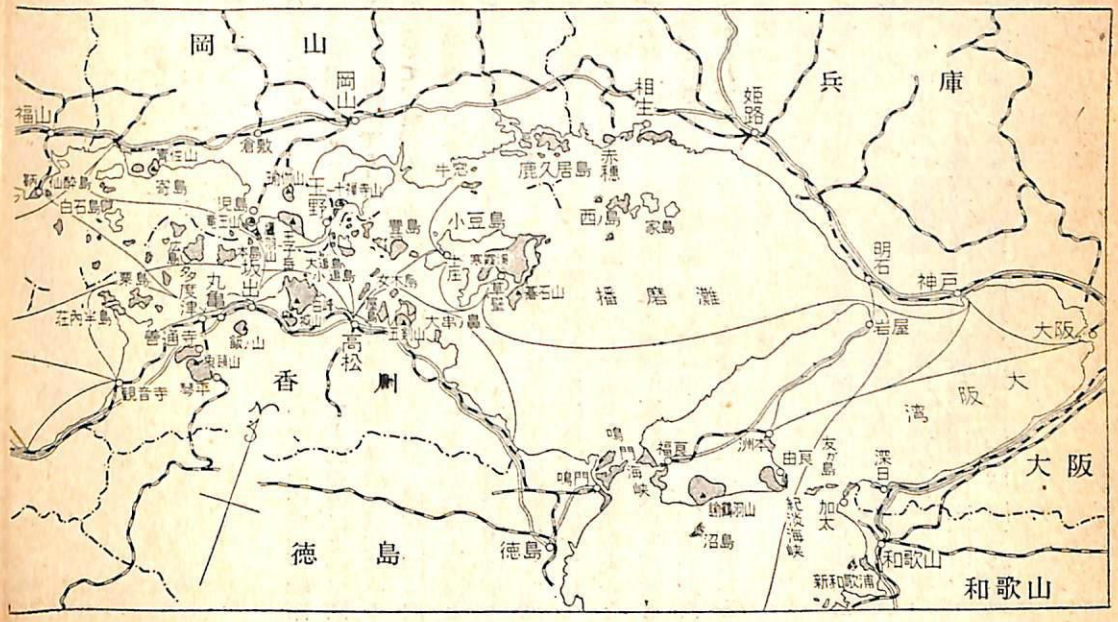
海上公園として地学的景観の勝れているのは、その成因を物語る大小陥没ブロツクを集成するところで、二～三の灘によつて隔てられた諸群島である。従つてこれを播磨灘・燧灘・周防灘その他を隔てて、紀淡鳴門地帯・備讃地帯・芸予地帯・西瀬戸内（周防）地帯等に区分して観察するのが便利である。また海上公園としての生命は利用上の利便と展望とにあるから、展望地点は種々の高度と俯角とを考慮して多数選んであるので、展望台として適当した地点は若干海岸線から離れたところにあつても包含されている。例えば讃岐平野に浮ぶメーサ・ビユート景観を望むものとしての象頭山や、その対岸岡山県の瑜伽山或は芸予叢島を前景として遙かに四国の石鎚山連峯までも望み得る海抜八四〇米の野呂山等がこれである。次にこれ等の主要景観を便宜上の分類である前述の区分に従つて、東の方から略述する。

紀淡鳴門地帯

和歌浦・雑賀崎（サイガサキ）附近やその属島は、淡路島南方の沼島（ヌシマ）と共に他に見られない三波川系の結晶片岩であるから海水が特に清澄で美しい。又中生代の和泉砂岩層から成る加太の瀬戸や友が島・地の島・沖の島等は常緑樹林が美しく、淡路島の洲本では三熊山の天然植生に珍らしいものがある。由良の海岸には砂洲で囲まれた鏡

のように静かな海面があり、諭鶴羽山の南面山麓地帯は水仙郷として有名である。又福良附近の吹上浜は白砂青松の立派な海浜で、鳴門海峡の動的美観と対照的な静けさを特色とする。鳴門海峡は徳島県側の観潮台から見る潮流や大渦が奇観であり、殊に時速二〇粁に及ぶ本邦最大の潮流と直径三〇米に達する渦潮とは、

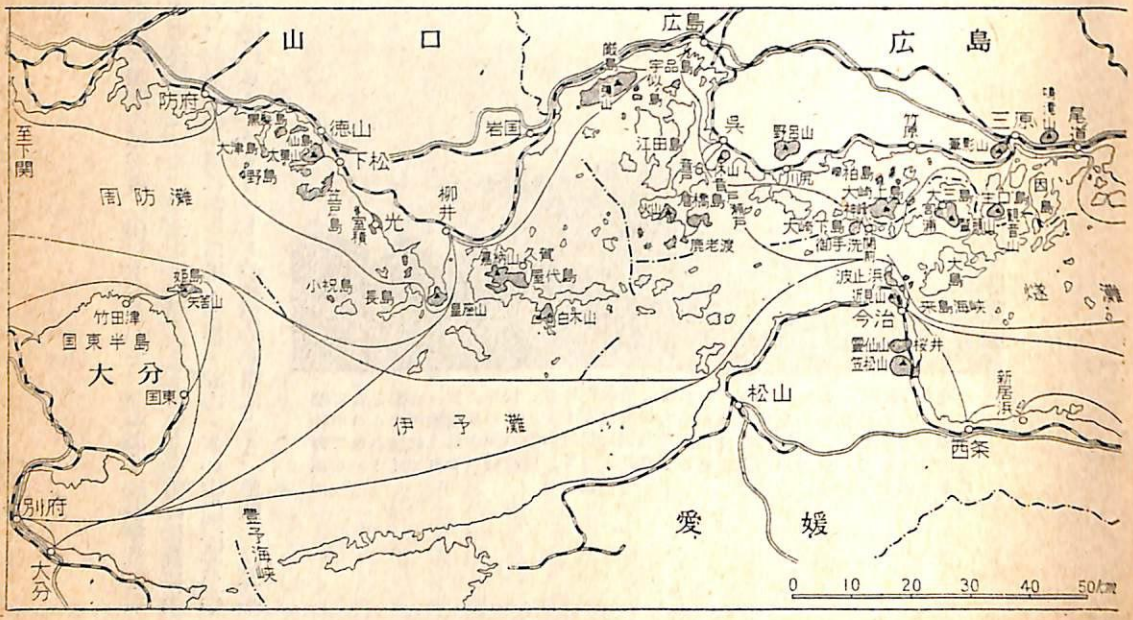
屋島　女木島海岸から見た屋島熔岩台地である。屋島は花崗岩の準平原面に噴出した瀬戸内火山帯の讃岐熔岩（サヌカイト）が，侵蝕を蒙つて標式的のメーサーとなつたもので，山頂は平であるが周辺部は直立した壁となつている。浅い谷によつて南嶺（写真の向つて左側）と，北嶺（写真右側）とに分れている。



世界にも稀な壮観として特筆すべきである。

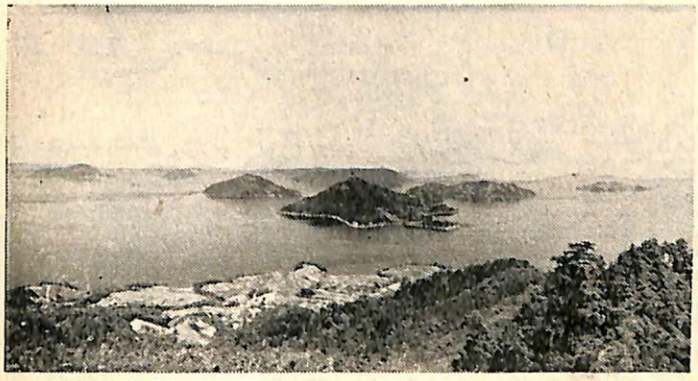
備讃地帯

前地帯から播磨灘の無島部分を隔てて家島群島があり、播磨西部海岸や岡山県の鹿久居島等から香川県の小豆島を経て、広島県の鞆と香川県の荘内半島を結ぶ線に至る間は最も島嶼の多い部分である。これを便宜上備讃地帯と呼ぶが、この備讃海峡内の諸島嶼は北西から南東方向の多数の平行断層と、これに直交して北東から南西方向を取る断層によつて配列を支配され、半島や海湾の位置方向・海岸線並に陸上の溪谷・河川・平野・山岳の配置布列等も皆此の地盤構造を反映しているのである。なおこれ等の島々は陥没地塊の残骸にすぎないから、新しい火山岩を戴いている小豆島・屋島・白峯台等を除けば皆昔の準平原の面影を存し、標高三〇〇米以上に出ているものはない。準平原部は大部分が花崗岩から成り、古生層と第三紀層の所も少しばかりある（児島半島・豊島・小豆島の一部）。瀬戸内海はまた瀬戸内火山帯（二上火山帯）に相当し、この火山帯特有の讃岐石岩（サヌカイト）・英安山岩・柘榴雲母安山岩・角閃雲母安山岩を始めとして輝石安山岩及びその集塊岩・玄武岩・石英祖面岩も所々に噴出している。その多くは屋島・白峯台等のように熔岩台（メーサ）となつているが、小型の饅頭形の熔岩丘も少なくない。そのうち屋島は花崗岩の準平原面に噴出したサヌカイトの熔岩台が、四方から侵蝕を蒙つて標式的のメーサとなつたもので、山頂は平であるが周辺部は直立した壁となつている。この周辺に大きく崖錐が発達して花



崗岩を被うているが、ここは浅い谷によつて南嶺と北嶺とに分れていて、女木島・男木島・大島等を前景に、遠く豊島・直島等の島々や大槌・小槌の双子島を望むことが出来る。下津井の鷲羽山は中国と四国が最も接近している部分にあつて、植生の立派な六口島や塩飽諸島を前景に讃岐のメーサやビュートの賑やかな山々を遠望することが出来る。六口島はクロマツ林で被われ内海一の美林と称せられるが、四国側海岸でも屋島台地の東方庵治村御殿山ではクロマツ林が立派で文字通り白砂青松の景を呈している。播磨西部の赤穂附近や家島群島は阪神に近い景勝地であり、石英粗面岩は採掘されているが主要部はゴヨウツツジ。シャシャンポ・コバノトネリコ等の灌木類で被われている。又鹿久居島は野生鹿が増殖し、対岸まで餌をあさりに泳いで来たという所である。日生沖にある曾島・鴻島・鶴島等の島嶼景観も美しく牛窓海岸は魚類の宝庫である。小豆島は海抜八一七米に達して内海島嶼中での最高点であるが、海岸線の屈曲は立派で名勝天然記念物に富んでいる。殊に寒霞渓は東部に星が城山、西部に御前が丸岳が聳え、集塊岩から成つている為に侵蝕作用の差異で奇岩・奇勝を構成することは耶馬渓式で、妙義山とも似ている。落葉広葉樹が多いので特に秋の紅葉の景観が優れている。特に東海岸は道路公園としても絶好の箇所で、碁石山の展望と共に小豆島の最優秀部である。次に五剱山山麓海岸として大串鼻・笹尾附近・竜王山等は海上からの眺望がよく、岡山県の十禅寺山は名勝地として展望によく、渋川は王子が岳（一五〇米）に接続した内海屈指の海水浴場である。

瑜伽山は讃岐の琴平宮に相対するもので、蓮台寺・瑜伽神社と共に展望が勝れている。竜王山は展望所として又通仙園は休養に適する。対岸の香川県にある白峯・青峯・城山・飯の山（讃岐富士）等は何れもメーサ・ビュートの地形で展望によく、象頭山は琴平



塩飽諸島　本島から眺めた多島海風景である。世界の海上公園として瀬戸内海は白砂青松の島嶼景観を最大の特色とする。この備讃瀬戸はその中特に優れた部分で，瀬戸内陸没の結果花崗岩侵蝕山地の頂が海上に現われて島となつている。又瀬戸内火山帯の活動によつて，讃岐岩（サヌカイト）を頭に載せた島もある。

宮背後の山であるが、植生はよく保護されて自然状態を呈している。標高も五二一米で展望台として好適である。荘内半島の紫雲出山は展望によく、その山麓海岸の箱崎は魚類が豊富である。岡山県の青佐山・寄島・御岳の区域は展望と暖帯植生で著名である。鞆の仙酔島は石英粗面岩であるがこの地質の植生との関係は花崗岩と同じで、弁天島・皇后島と共に白砂青松景観である。尚瀬戸内海の水深は非常に浅く平均二〇米から四〇米で最深部でも七〇米級であるが、干満の差は鞆附近が最大で四米に達する。

芸予地帯

広島県尾道市の鳴滝山は三原市の筆影山や生口島の観音山と共に附近瀬戸田・大久野島・小久野島・阿波島等を含めた多島海風景を展望する絶好の箇所である。大三島（愛媛県）の主峯として秩父古生層からなる鷲が頭山の展望は瀬戸内海中優れたものであり大崎上島の神峯山は附近の臼島・船島・佐組島等と共に内海の添景であり、その山頂の展望はこの地帯で最も傑出している。下島の御手洗は標高四四八米の展望地点を有し、人文景観ではあるが山麓一帯のミカン畠の壮観がすばらしい。対岸の関前村（愛媛県）にある観音崎は名勝地であり、波止浜は附近の近見山・笠松山と共に来島海峡の島嶼展望に第一級のものである。広島県の野呂山は海抜八四〇米、瀬戸内海周辺第一の高原であつて、夏期は避暑地ともなり、冬は天然スケート場にも適するので、瀬戸内海の軽井沢的存在であるが、内海の展望所としても最も高いので、内海を隔てて四国の背陵山脈である石鎚のアルプス景観も眺められる。倉橋島では桂浜が白砂青松景観であり、火山の展望もすばらしい。日本三景の一つである厳島は殆ど全島が国有林で、この公園中第一のうつそうとした景観を示しその主峯弥山は絶好の展望所である。

これ等の芸予叢島は古生層及び花崗岩・石英粗面岩等の地質から成り、比較的大きな島嶼が密集して長瀬戸・鼻栗瀬戸・来島海峡等多数の峡谷のように迫つた「瀬戸」をなし急潮による独特の景趣をもつている。

西瀬戸内（周防）地帯

山口県大島郡の屋代島は大島とも呼ばれ、源明峠・嘉納山・白木山は島嶼や岬角の展望、嵩山はこの附近稀に見るトロイデ火山で自然研究の対象である。室津半島の皇座山は周辺島嶼の展望によく、光市の室積公園にある峨媚山からの展望、松原海岸のクロマツ林も優れている。徳山市大島半島の太華山は徳山湾・笠戸湾等を囲む仙島・黒髪島・大津島・野島・笠戸島等の展望に絶好である。これ等の地質は古生層・花崗片麻岩・新火山岩等の変化のあるもので、地形は塩飽諸島と芸予叢島との特徴を併有した特異の景観を呈する。大分県の姫島は全島地学博物館とも云うべきで、黒耀石や各種地質構造の好露出が見られ、海蝕地形や化石産地等全く自然研究の青空教室である。

以上で各地帯の一瞥を終つたが、全般的に降雨量が本邦中で最も少いので、四季を通じて快晴に恵まれ、朝夕の景観に勝れてい

る。森林も友が島・琴平山・厳島等に常緑広葉樹・寒霞渓に落葉広葉樹の自然林が見られる外は、所謂「白砂青松」のクロマツ・アカマツ等を主とする疎林で、明朗な景趣を現出している。傾斜地に展開されている段々畑には特色があり、ミカン・ビワ・モモ・イチヂク等の果樹園の文化的な景観がこの地帯の主調をなしている。従つてこの公園では個々の地点をみると自然景観が文化景観におされているところもあるが、前述したようにこの国立公園の価値は展望の対象である地貌の構成や成因にあるので、この地帯の自然景観がどんな過程で成長したかを略記しよう。

(一) 凡そ二千万年から二千六百万年の昔中国地方は古第三紀の浸蝕によつて低くなつた背陵山脈の南側に中新世の海蝕が起り内海をつくつた。又東隣の近畿からも海が浸入して来たが、これによつて小豆島や豊島の中新層を堆積した。これが瀬戸内海の卵である。

(二) その後中新世から鮮新世の間（約五百万年から千五百万年前）日本列島中央構造線の北側（南西日本内帯の南側）に沿つて火山活動が盛んとなり、瀬戸内火山帯（東は三河の鳳来寺山から大和の二上山や小豆島の寒霞渓を通つて、西は大分県の姫島へ抜ける火山帯）が活動を始めた。この時の熔岩が讃岐岩（俗にカンカン石と呼ばれるサヌカイト）として今日屋島・青峯・白峯台・象頭山等の頂上に見られる。この頃のことを第一瀬戸内時階と称するが一口で云うと瀬戸内海の揺籃時代である。

(三) その後鮮新世の頃（数百万年前）は日本は朝鮮半島を経て大陸と接続していたのでステゴドン象の一種が活躍していた。これは明石海岸等に発達する明石層群と云う含化石層から淡水貝類やセクオイヤ・クルミ等の植物化石と共にパラステゴドン・アカシエンシスという象の臼歯や牙（門歯）が出るので判る。この頃は瀬戸内海は大部分陸化していたが一口で云うと幼年時代である。

(四) その後第四紀に入つて洪積世の始め（約六十万年から百万年前）に海浸が起り、瀬戸内海の陥没地帯は北は若狭湾から琵琶湖を通り大阪湾や現在の瀬戸内海を経て、西は北九州の有明海に至るまで海の部分が拡がつて、残存ブロックが島嶼となり多島海が出現した。鳴門海峡や紀淡海峡が開口して外海と連絡したのもこの頃で、ステゴドン象は絶滅した。この時代の瀬戸内海は最も海の部分が広かつたが、成長史から云えば少年時代である。

(五) その後洪積世の中頃（約四十万年から五十万年前）以降、再び造山運動が盛んとなり、瀬戸内火山帯の北側に北西～南東と北東～南西との二方向の断層線が交錯し寄木細工状に地塊化し、内海陥没の側圧によつて諸所に衝上断層の地塁が出来た。一方北九州地帯では阿蘇の前身の火山活動が起り、筑紫地塊と球磨地塊とが接続し、再び大陸との連絡もあつたらしく、ナマジクス象が侵入し活躍した。この象の臼歯や骨が瀬戸内海の諸所から漁網にかゝつて出るが、明石海岸の播磨層群（明石層の上位）という化石層にも含まれるので、同層群のものと考えら

れている。これが日本島の大陸と陸続きであつた最後の時代で、瀬戸内海の成長史では青年時代と云えよう。

(六) その後洪積世末期に再び海浸によつて大陸と離れ、陥没の程度によつて大小の多島部分と無島部分とが出来て、沿岸は殆ど現在の輪廓となり、ナマジクス象は絶滅して現世となつた。これが現在の瀬戸内海完成の時代である。

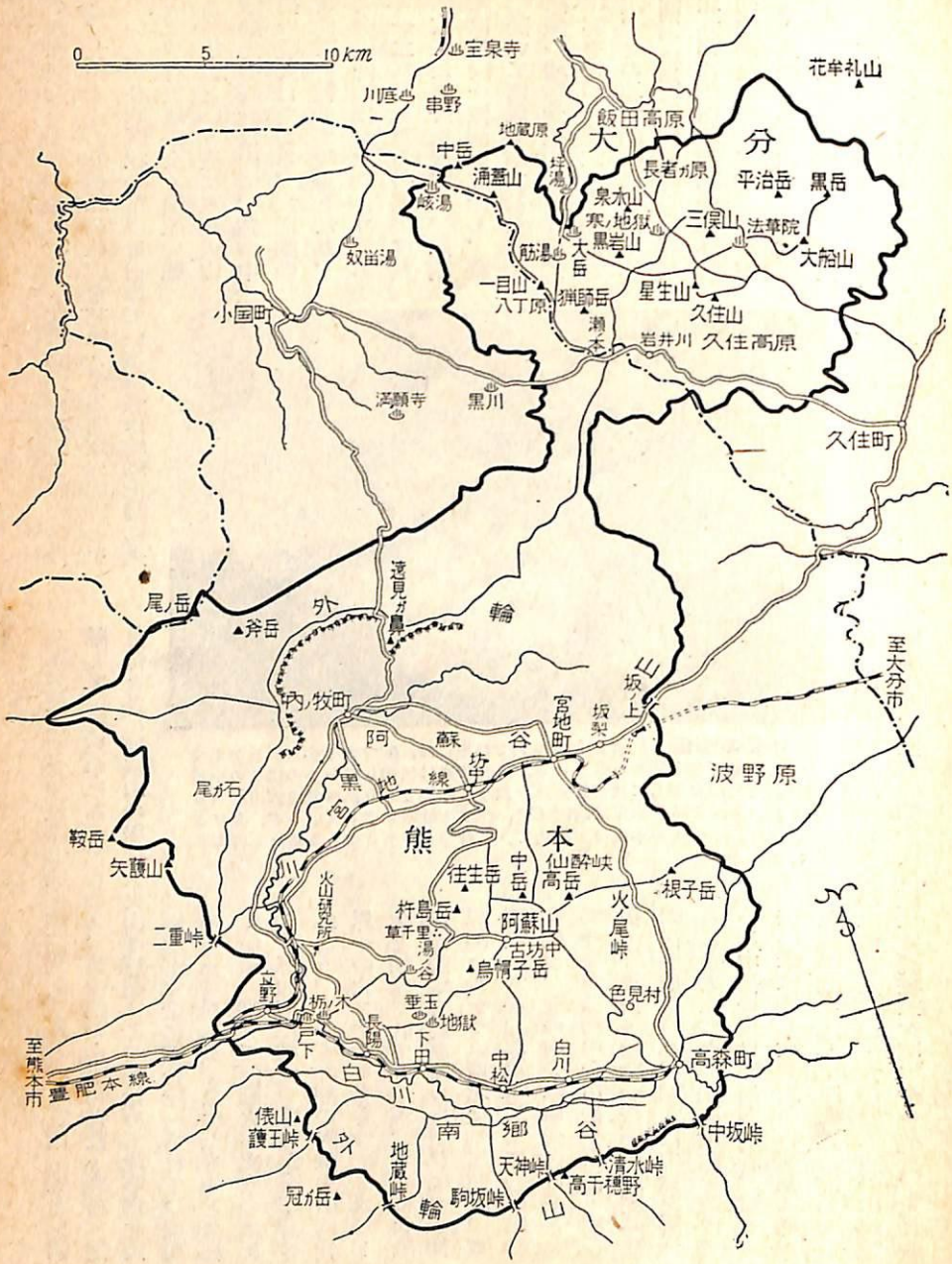
瀬戸内海は見方によれば特色のある日本文化を育成した触媒ということができよう。欧州の瀬戸内海といえる地中海が陸を分離するものでなく却つて陸をつないだと同じように、瀬戸内海は陸と陸の文化をつなぐ役割をした。瀬戸内海の歴史は神武天皇の東征からはじまる。現在瀬戸内海国立公園の各地には御東征に関連した伝説が到る所にのこされている。神功皇后の三韓征伐軍の輸送は主として越前博多の人たちの協力によるものであつたが、この挙につゞいて九州の文化が瀬戸内海を通じて瀬戸内海の東部武庫地方にまで展げられた。

瀬戸内海を舞台とする源平の戦はあまりに著名であるが、瀬戸内海は唯に文化の交流路であつたばかりでなく、水軍の発生の基地であつた。蒙古の襲来の際にも瀬戸内海の水軍は活躍したが、倭寇として朝鮮や支那の広大な海域に進出して海賊の暴力を恣にしたのも瀬戸内海の根拠地ではぐくまれたものであつた。九州から再挙をはかつた足利尊氏の成功も瀬戸内海の強力な水軍の協力に因るものであつた。大内氏は瀬戸内海を交通路として山口と堺を結んで文化の興隆に努めたが、秀吉の朝鮮征伐に際しては瀬戸内海の各方面、特に塩飽諸島の水軍が夥しく召し上げられて活躍している。京都が千年の長きに亘つて帝都として存続したのも瀬戸内海が常に新しい文化を移入しつゞけたことにも一つの因が求められよう。このように考えると瀬戸内海は一方は淀川から琵琶湖に他方は直接大陸と結ばれた文化の一大動脈に欠くことのできない存在といつてよい。神武天皇以来移り変つた航路の変遷、それに伴つて興亡をくりかえした沿岸や島々の港、文化の推移をさぐるなら瀬戸内海の国立公園はあまりにも豊かな文化史をもつことに気がつくであろう。

瀬戸内海にはこれらの長い文化史がのこしている幾多の社寺、史蹟、名勝、旧蹟、それに伝説が数えられる。最も著名なものは昔からの日本三景の一つとして名高い厳島神社である。創建は推古帝の昔と伝えられるが、その後平清盛が造営して現在の規模を残したものとされている。神社に連らなる朱塗の廻廊は幅二間一尺、延長百四十八間、満潮の海に浮ぶ様は自然と人工の極致といつてよい。海中に浮ぶ高さ八間五尺三寸の朱塗の大鳥居は厳島の象徴として古来著名である。そのほか瀬戸内海には鞆の阿伏兎観音、屋島神社や屋島寺など幾多の社寺史蹟をもつ屋島、刀剣鎧などの豊富な国宝で有名な大三島の大山祇神社、岡山の由枷山の蓮台寺、舟乗りの信仰の厚い讃岐の金刀比羅宮などが数えられる。

更に瀬戸内海には海に因んだ浦島太郎の伝説があり、桃太郎の伝説がつたえられている。これらの日本の代表的な伝説は各地に

のこされているが、何か常識的に瀬戸内海との縁が一番深いように考えられる。浦島の伝説地は香川県の荘内村の半島部である。こゝにのこされた数々の言いつたえをもつ旧蹟は浦島の物語と共に興味がある。桃太郎の伝説地も各地にあるが瀬戸内海では高松の北方海上七粁の女木島である。女木島は花崗岩の基盤上に凝灰岩、その上に安山岩があり、安山岩は横臥柱状節理を呈しているが下部の凝灰岩は早くから堀られたものか、あとに洞窟をのこしている。女木島に一番大きなものがあり、これが鬼がいた岩屋だとされ、女木島を別の名で鬼ケ島とよんでいる。我国における桃太郎の伝説地は岡山と愛知の犬山とこの女木島とであるが、桃太郎の伝説には何か倭寇の海賊的な感覚があり、矢張り瀬戸内海がその発祥地のようにも考えられる。その真偽はいづれでもよいが、瀬戸内海の国立公園は世界的な多島海と瀬戸の自然景観と共に、深い文化的な興味の尽きない海上公園である。

阿蘇国立公園

指定　昭和9(1934)年12月4日
面積　67,827 陌